

日本真言宗事

文応元年

三九歳

日本真言宗祖師の下

空海



実慧 檜の尾の僧都
真濟 高尾の僧正

真雅 貞観寺の僧正
真然 高野の僧正、時の別当なり

実慧

宗叡 円覚寺の僧正

真雅



益信 円成寺の僧正、仁和寺の始めなり

聖宝 桜本の僧正、醍醐寺の始めなり

聖宝



観賢 般若寺の僧正、両寺を一人にて持つ

延・権 権律師

観宿 権律師

濟高 大僧都

貞崇 権小僧都

寛空



泰舜 権律師、蓮舟律師の弟子

寛空 寛平法皇の御弟子、蓮台寺の僧正

救世 益信流、山階寺の人

寛朝



寛静 西院の僧正

定昭 嵯峨の僧正

寛朝 広沢の僧正

広沢流

仁和寺

寛朝



雅慶 勸修寺の僧正

濟信 仁和寺の僧正

深覚

仁海

元果僧都の弟子、雨の僧正とも云ひ小野の僧正とも云ふ
醍醐の真言は小野流を祖とす

弘法伝来記に一卷信救作「弘法大師帰朝の後真言宗を立てんと欲す。諸宗面門俄かに群集して即身成仏の疑ふ。大師智拳の印を結びて南方に向かふ。争ひ即身頓証の開けて金色の毘盧遮那と成り、即便本体に還歸す。入我我入の争ひ即身頓証の開けて金色の毘盧遮那と成り、即便本体に還歸す。入我我入是の時より而も建立す」文。孔雀經の音義の序に「此の時諸宗の学徒大師に帰し、天台の円澄等皆其の類なり」孔雀經音義真濟の記なり。大師伝に云は雄、

く「帰朝舟を泛かぶるの日發願して云はく、我が学ぶ所の教法若し感応の地有らば此の三鈷其の処に至るべしと。仍つて日本の方に向かひ三鈷を抛げ上げたまふ。遙かに飛んで雲に入る。十月に帰朝す」と。又云はく「高野山に入定の所を占む。乃至彼の海上の三鈷今新たに此に在り」と。

金剛頂經の疏に云はく 慈覺釈 「毘盧遮那經に云はく、我昔道場に坐して四魔を降伏すと。此を以て知ることを得、毘盧遮那仏久現証と云ふと雖も、而も成仏以來甚だ大いに久遠なることを」と。又云はく「彼の法華久遠の成仏は只此の經の毘盧遮那仏なり、異解すべからず」と。

教時義の四に云はく 安然の釈、弘法を破するの文なり 「但し此の文中に法華を判じて略説と為すことは唯理を説けばなり。故に知んぬ、真言教を広説と為すことは、広説とは事理を説けばなり」と。

秘藏宝鑰の中に云はく「謗人謗法は定めて阿鼻獄に墮して更に出づる期無し。世人此の義を知らず。舌に任せて輒く談じ深害を顧みず。寧ろ日夜に十悪・五逆を作るべくも一言一語も人法を謗るべからず」と。又云はく「師の曰く、菩薩の用心は慈悲を以て本と為し、利他を以て先と為す。能く斯の心に住して浅執を破し深教に入る利益尤も広し。若し名利の心を挟みて浅教に執して深法を破すれば斯の尤を免れず」と。

教王經の開題に云はく「金剛頂經及び大日經は、並びに是竜猛菩薩南天の鉄塔の中より誦し出だす所なり」と。

不空三藏の要決に云はく「其の大經本は阿闍梨の云はく、經帙広長にして床の如し。厚さ四五尺、無量の頌有り。南天竺界の鉄塔の中に在り」と。付法伝に云はく「鉄塔は是人功の所造に非ず。如来神力の所造なり」と。

大日經に云はく「大日遍照尊微塵衆生と為りて八相示現を成し、衆生と同じく受苦す」文。